

質問（竹村公太郎氏に対して）

- (1) 資料1の9番目スライド「長良川のしゅんせつと塩水の侵入防止」のうちの「河口堰がなく長良川をしゅんせつした場合」として記載されている塩水遡上の距離と形態は、常に、つまり365日間の24時間において、そのようなものであると、竹村氏が河川部長であった建設省中部地方建設局（当時）は説明していましたか。
- (2) 資料1の14番目のスライド「長良川河口堰の水資源開発の原理」に記載されている長良川用水勝賀取水口、長良川用水新大江取水口、北伊勢工業用水第2取水口、福原用水取水口、北伊勢工業用水取水口、長良導水による水利の全てが長良川河口堰によって開発されたものですか。

意見

- (1) 竹村公太郎氏の資料1の9番目スライド「長良川のしゅんせつと塩水の侵入防止」のうちの「河口堰がなく長良川をしゅんせつした場合」として記載されている塩水遡上の距離と形態は、長良川の流量が30m³/s（ほぼ渇水流量＝一年のうち355日はこれを下回らない流量）の時の小潮（塩水と河川水の弱混合、塩水楔形成）時における満潮時の塩水の遡上距離と遡上形態であって、一年のうちのまれにしか起こらない可能性の日の満潮時2回の計算による距離と形態である。

塩水上の形態と距離は、月齢・流量・潮位に応じて、多様に変化し、塩水遡上距離は上記スライドよりも上流に至らず、長良川用水の勝賀取水口はもとより、新大江取水口も、水深断面の殆どが塩水にならないので、取水に影響がない（図1）。

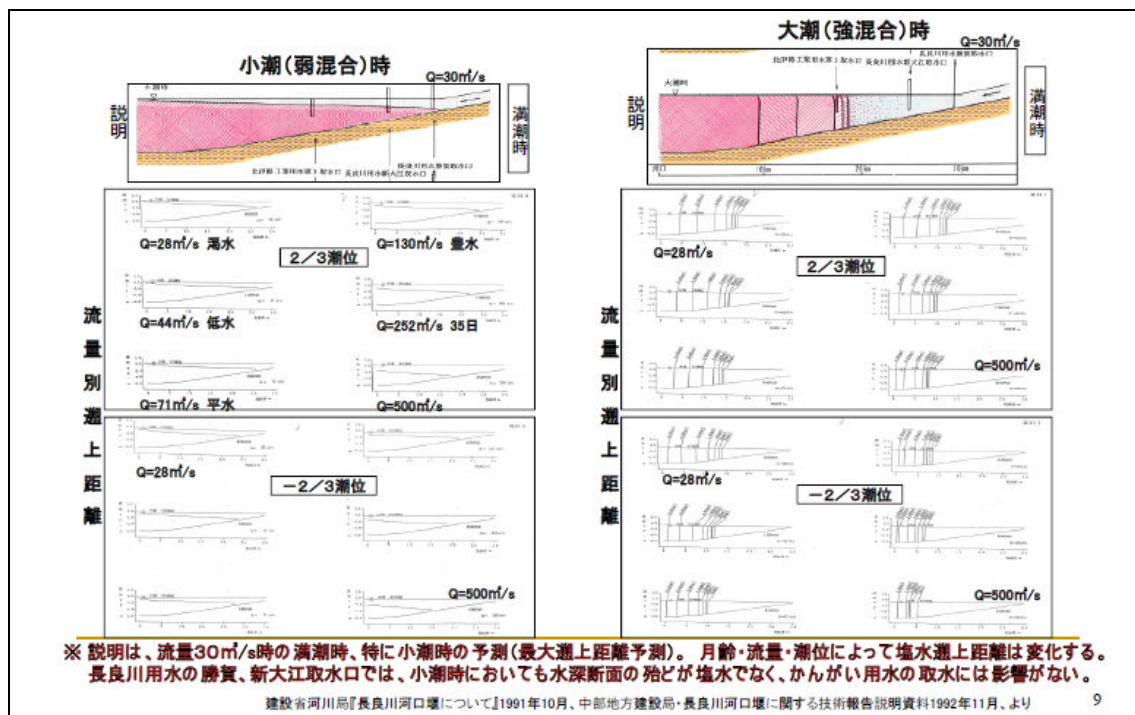


図1 建設省（国土交通省）による長良川における浚渫後の塩水遡上予測計算結果

(2) 資料1の14番目のスライド「長良川河口堰の水資源開発の原理」に記載されている長良川用水勝賀取水口、長良川用水新大江取水口、北伊勢工業用水第2取水口、福原用水取水口、北伊勢工業用水取水口、長良導水による水利のうち、長良川河口堰によって開発されたのは、長良導水の愛知県水道用水だけである。

上記(1)のように、長良川用水の勝賀取水口と新大江取水口でのかんがい用水の取水には問題がない。浚渫前から塩水遡上部で取水していた福原用水取水口でのかんがい用水の取水も同様である。また、北伊勢工業用水第2取水口（第1取水口の塩水化のために移設したものである）の取水は、長良川河口堰建設前と同じような取水をすればよく、北伊勢工業用水は過剰な余剰水をかかえており、供給に問題は生じない（富樫幸一資料3 No. 3、9、10参照）。

そのうえ、図2のように、現在では、15km地点付近で、河床突起部（マウンド）が再び形成されており、塩水の遡上を障害するようになっている。

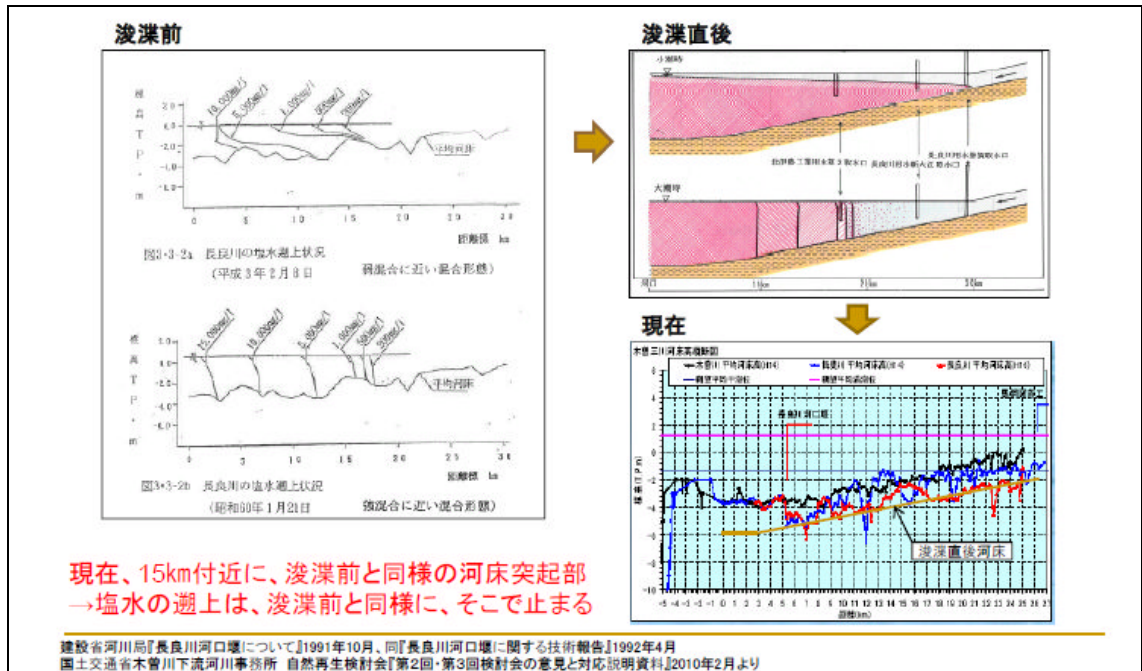


図2 長良川の河床高の変化（浚渫後の河床突起部の再形成）

長良導水が供給する愛知県知多地域の水道用水は、長良川河口堰建設前は、木曾川大堰から取水する全く使用すあてのない愛知県工業用水（名古屋臨海工業用水道）2.53m³/s を利用していたものであり、長良導水を止めて、再度これを利用すればよい（富樫幸一資料3 No. 3、16）。愛知県知多地域の水道用水は、長良導水取水口の原水の水質が余りにも悪いため、水がまずいうえ、活性炭使用によるコスト増だけでなく、健康リスクが懸念されるので、長良導水の使用を止めたほうがよい（田中豊穂資料2「水利用の衛生学的問題」参照）。